

「いのちをつなぐ」

鳥取県 梅翁寺住職 倉瀧英信
ばいおうじ くらたきえいしん

あるお檀家さんの葬儀でのことです。その女性は、百十才をこえた大往生でした。明治・大正・昭和・平成・令和と、五つの時代を生き抜いたお顔は、お人柄を象徴するかのようによやかでした。通夜の際、あることに気づきました。棺の中に、毛筆のメッセージが入れているのが見えたのです。おそらくご遺族の思いのこもった言葉ではないかと想像できました。

無事葬儀を終え、喪主であるお孫さんに尋ねてみました。「メッセージはどなたが書かれたのでしょうか」「あれは、私の妻が書いたものです」。私は奥さまに、何が書かれているのか教えていただきました。

「おばあちゃん、いつも心配してくれてありがとう」

「おばあちゃん、みんなを勇気づけてくれてありがとう」

「おばあちゃん、いのちをつないでくれてありがとう」

3つのメッセージは、感謝の思いに満ちあふれていました。奥さまから、生前のおばあ様のことをお聞きしました。施設にお見舞いに行くことと笑顔で迎えてくださり、いつも家族を心配なさっていたそうです。その心遣いの背景には、おばあ様が早くにご主人を亡くされ、晩年には、息子さん夫婦も他界されるという悲しい経験から生まれた慈しみの思いがあったからでしょう。おばあ様の存在は家族にとって大きなものであり、その思いはお孫さん夫婦にしつかりと継承されたのです。

今、このようなご家庭は少なくなってきました。「家」を代々守っていくことが当然であった時代は終わり、「個」を守っていくことが第一となりました。少子高齢化が進み、また、コロナ禍の、制限の多い暮らしの中で私たちは目の前のことに精いっぱいです。家族のありようも変わり、「代々のいのち」をつないでいくことが困難になってきました。近年私がお預かりしているお寺でも、永代供養や墓じまいの相談が増加しています。それぞれにお家の事情があり、どれが一番よい形なのか、いつも考えさせられます。

「いのちをつなぐ」ということは、生きている私たちができる範囲で、先人の思いや行いを共有し、それぞれの場所で実践することではないでしょうか。ひとつの葬儀を通して、さまざまなきことを感じることができました。